

「議論の十字」モデルを用いた新たな議論分析手法の 開発のための基礎研究

坂本智香

(高知大学教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門)

Foundational Research for the Development of a New Method of Argument Analysis
with the Message Construction Cross

Chika Sakamoto

*Kochi University Research and Education Faculty Humanities and Social Science Cluster
Humanities and Social Science Unit*

Abstract: This paper discusses the potentiality of the 20 criteria suggested by Makino (2013) to analyze speeches and written arguments for the foundation of a new method of argument analysis.

According to Makino (ibid.), an ideal argument consists of seven factors: issue, specific, general, antithesis, synthesis, thesis, opinion. In addition, those factors design a system called ‘the Message Construction Cross (MCC)’. The system is so labeled since, in an ideal argument, the seven factors function to develop three molecules, or stems, which are then integrated into the shape of a cross. Then, a valid and perfect MCC is also believed to be composed of the three stems: (i) thesis-general-specific, (ii) antithesis-synthesis-thesis, and (iii) issue-thesis-opinion.

Basic concepts of Makino’s criteria are essentially correct, however, the effectiveness and applicability from the viewpoint of introductory and practical argument analysis in line with the written argument structure (introduction, body, conclusion) have downsides in regard to the following aspects.

The 20 criteria and the levels of argument analysis are arranged with little regard to the written argument structure as well as the reference order in the process of writing an argument. Furthermore, the original criteria fail to provide the complete picture of relationships between the factors and stems which are indispensable for thorough and elaborative argument analysis.

This paper thus proposes a new method with revised and added criteria to analyze all the necessary relationships between the factors and stems in the sequence which follow the written argument structure and the process of writing arguments in order for thorough and elaborative argument analysis to be successfully implemented.

キーワード： 議論の十字, 7つの構成要素, 三本の軸, 議論分析

Keywords: the Message Construction Cross, seven argument factors, three stems, argument analysis

1 はじめに

1.1 背景

「意見文」・「小論文」¹は、日本語アカデミックライティング教育で課題に設定されることの多い文章ジャンルの1つである。また、大場・大島²によれば、これらの文章ジャンルを扱う教育実践の近年の動向^(注1)として、「ツールミンモデル」^{3(注2)}や「ディベートの立論の型」等を援用して「論理的文章」を書くための「型」を指導する事例^{4,5}、「論証構造図」を利用して論文等の文章の構造分析を行う事例⁶があるという。

では、これらの指導法と組み合わせて行われる「評価」はどのような観点から行われているのだろうか。例えばツールミンモデルに依拠した論証の型の指導⁷(一文一義及び一文の文字数を少なくする指導あり)では、「「事実」」,「「意見」」,「「理由」」の「関係性」」,「「事実」」の「具体性」と「妥当性」」,「「理由」」の「明瞭さ」と「妥当性」」の3つの観点から成る「論理性の指標」が使用されている(下線は筆者)。また「ディベートの立論の型」に依拠した立論の指導⁸(文章作成テンプレートを利用して書く指導あり)では具体的な評価観点は提示されていないが、指導後の文章作成では問題点と解決策の間で「「呼応関係」」や「「一貫性」」, 解決策の「「具体性」」が向上したと報告されている(下線は筆者)。^(注3)

これらの報告から、「論証」や「立論」といった、いわゆる議論構築の方法に関する指導との組み合わせでは、「論理性」(____部)と「情報の質・量」(_____部)の2つの評価観点が用いられていることがわかる。

「論理性」や「情報の質・量」は、「レトリック」(＝言葉をもちいた説得法)⁹の分野における議論分析・議論構築の指導法の中で重視されてきた観点である。例えば、クルーシアス・チャンネルは、ツールミンモデルに依拠した議論分析で説得力を評価するためには、根拠の「適切さ」,「論点との関連性」といった論理性の他に、根拠は「十分なのか」,「正確なのか」,「信頼できるものか」といった情報の質・量に関する分析も行われるべきであることを指摘している。¹⁰

1.2 目的

1.1で紹介した「議論分析」は、しかしながら、厳密に言えば「議論」の中の「論証」の分析である。^(注4)しかし、論文・レポート作成では、論証は本論で述べ、その前後に序論と結論を配置する3部構成が基本である。本論(＝論証)部分だけでなく、序論や結論も含めた「議論全体」について分析する方法はないのだろうか。

以上をふまえて、本稿では、「議論の十字モデル」に基づく評価の観点¹¹を取り上げ、理論的基盤を概観(2節)した後、論文・レポートの議論分析に用いる際の課題と改善案について検討する(3節)。

2 「議論の十字」モデル

2.1 「議論の十字」と「議論の十字」の七つの構成要素

「議論の十字」モデルは、牧野¹²が「議論の過程と構造と成果について、原子や分子が有機的に結合して化合物を生成するという化学反応の法則になぞらえて表した概念図」である。そして、図1¹³・図2¹⁴に示した2つの図で表示される。図1は議論全体の構造を表したものである。それに対し、図2は議論の全体(図1)を細分化したものであり、「議論の十字」を構成する七つの要素を表している。なお、図1は、図2の「七つの要素」が後述の化学反応による結合を繰り返すことで生成された概念(分子と、分子どうしがさらに結合して生成された化合物)が、結晶のような有機体とし

て結合している様子を示したものとされている。

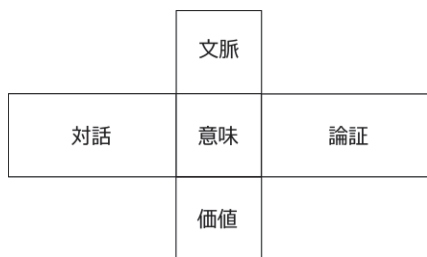


図 1 「議論の十字」



図 2 「議論の十字」を構成する七つの要素（静的イメージ）

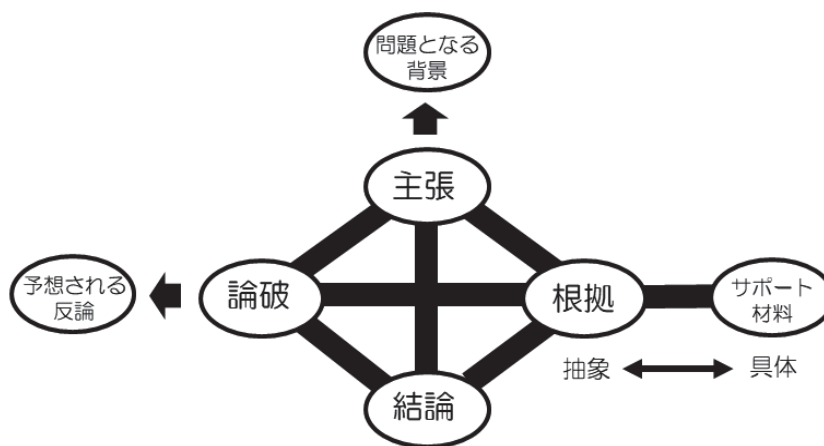


図 3 「論理のしくみ図」（牧野 2008, p. 207）

表 1 「議論の十字」と「論理のしくみ図」

	議論の十字	論理のしくみ図
7つの 構成要素	背景	問題となる背景
	命題	主張
	抽象	根拠
	具体	サポート材料
	反論	予想される反論
	論駁	論破
	提言	結論

表 2 「論理のしくみ図」に含まれる七つの要素の定義

問題となる背景	【主張】の前提となる問題意識（【主張】に至るまでの経緯・きっかけ）
主張	【問題となる背景】に対する意見（【根拠】【サポート材料】に支持される）
根拠	【主張】を支える抽象的・仮説的な概念（【主張】の土台となる理由）
サポート材料	【根拠】を支える具体的な材料（抽象的・仮説的な【根拠】の具体化）
予想される反論	【主張】【根拠】【サポート材料】と対立・矛盾する立場（それを支える情報）
論破	【予想される反論】に対する回答（【反論】に対し【主張】を擁護する）
結論	【主張】を強化するまとめ（【問題となる背景】に対する提言）

化学反応のプロセスを概観する前に、まず、図 2 に含まれる、「七つの要素」の定義を確認しておく。「議論の十字」の七つの要素の定義は、「議論の十字」の前身にあたる「論理のしくみ図」（図 3¹⁵⁾ を構成している 7 つの要素の定義を引き継いでいる。

表 1¹⁶⁾は、「論理のしくみ図」（図 3）の「七つの要素」と「議論の十字」の七つの要素（図 2）との対応関係を、表 2¹⁷⁾は「論理のしくみ図」（図 3）の「七つの要素」の定義である。

表 2 については、1 点補足がある。それは、牧野が表 2 の【根拠】と【サポート材料】の間に「演

「演繹的・帰納的な関係」を義務付けているということである。

ここでは「帰納的な関係」から先に説明する。「帰納的」とは、例えば「りんご、みかん、ぶどう」(＝【サポート材料】＝【具体】)を見ながら、「果物って、木になるもの?」という仮説(＝【根拠】＝【抽象】)を設定し、その後、「りんご、みかん、ぶどう」に対してその仮説が実際にあてはまるかどうかを検証していく思考プロセスのことである。

それに対し「演繹的な関係」とは、「果物は、木になるものである」という仮説(＝【根拠】＝【抽象】)が先にあり、その後、例えば「メロン、スイカ、イチゴ」(＝【サポート材料】＝【具体】)にその仮説があてはまるかどうか、という観点から検証していく思考プロセスのことである。(注5)

2.2 「七つの要素」の「原子」的性質

牧野はさらに、図2の「七つの要素」を「原子」に喩え、他の要素と化学反応することにより3種類の分子(論証分子、実用分子、対話分子)(＝「三本の軸」¹⁸とも呼ばれる)になり、さらに分子どうしが相互に反応して「化合物」(図4¹⁹)を生成すると述べている。

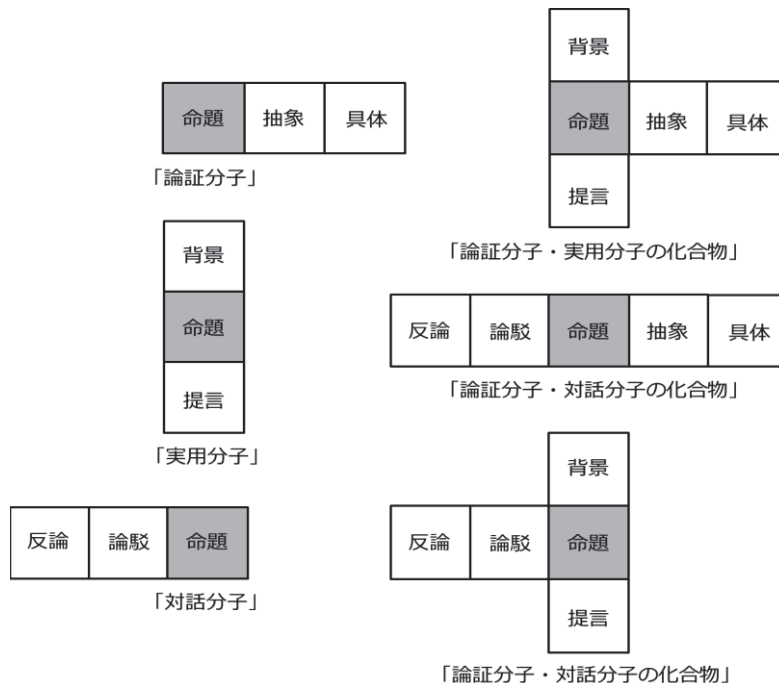


図4 「議論の十字」を生成する化学反応(動的イメージ)

紙幅の都合上、詳細²⁰は省略するが、図2と図4の関係を簡単に確認すると次のようになる。まず、図2の「七つの要素」は、化学反応を起こす前の静的な「原子」としての要素の状態を表している。議論が始まり、個々の要素に該当する情報が明らかになってくると、それら(＝要素＝原子)は化学反応を開始する。

例えば、図4の「論証分子」は【命題】・【抽象】・【具体】という3要素(3原子)の化学反応により生成される。結合の順序については、先に【抽象】と【具体】が結合し、そこから【命題】が導かれる場合もあれば、【命題】が先にあり、それを支える【抽象】が続き、【抽象】をサポートする【具体】が加わる場合もある。つまり、「論証分子」の生成にあたっては、「具体→抽象」(帰納的思考)と「抽象→具体」(演繹的思考)が繰り返されていることになる。

化学反応により生成される分子には、他に「実用分子」と「対話分子」がある。「実用分子」は【背景】・【命題】・【提言】の3要素(＝3原子)から生成されるが、この化学反応の過程は、それまで意識されていなかった問題が意識されるようになり(＝【背景】)、同時に、その問題に対する自ら

の立場が自覚される（＝【命題】）過程に対応している。次に、「対話分子」は【反論】・【論駁】・【命題】の3要素（＝3原子）の結合により生成される。これら3つの要素の間には、【反論】が【命題】の妥当性を攻撃するのに対し、【論駁】は【命題】を支持し擁護する関係が成立している。

「議論の十字」（図2）の「七つの要素」から生成された「論証分子」・「実用分子」・「対話分子」は、さらに互いに結合し化合物を生成することで、より安定性が高まる。図4には、「論証分子」と「実用分子」が結合した「論証分子・実用分子の化合物」、「論証分子」と「対話分子」が結合した「論証分子・対話分子の化合物」、「対話分子」と「実用分子」が結合した「論証分子・対話分子の化合物」が掲載されている。そして、「論証分子」「実用分子」「対話分子」の結合によって生成される「論証分子・実用分子・対話分子の化合物」が最も安定した状態をなし、「議論の十字」を構成する七つの要素の静的イメージ（＝図2）（中略）として表される²¹という（補足は筆者）。

上述の3つの分子、すなわち「三本の軸」の概念は、その後、「議論の十字モデル」に依拠した論理構築力の測定において重要な役割を果たす。しかし、ここでは紙幅の都合上、測定基準や測定方法の詳細には触れない。ただし、「議論の十字モデル」を論理構築力の測定に用いる背景としての牧野の一連の考え方は、3節で取り上げる「議論の十字モデル」に基づく評価の観点の前提にもなっていると考えられ、重要である。

具体的には、「三本の軸」の存在そのものである。なぜなら、「三本の軸」の存在を仮定することによって初めて、個々の軸内の有機性、軸と軸の間の有機性という観点から、論文・レポートを構成する個々の要素の適性を適切に評価することができるようになるからである。また、「三本の軸」がすべて【命題】を中心としており、「三本の軸」の適性を検討することで、【命題】を核とする論理構造全体を分析することができるからでもある。

3 論文・レポートの構成を意識した議論分析の可能性と課題

3.1 「議論の十字モデル」に基づく評価の観点

表3²²は、「議論の十字」と「議論の十字」の七つの要素をふまえて開発された、「議論の十字モデル」に基づく評価の観点である。上方の横の列には、各評価観点が実際に評価しようとしている要素が具体的に何であるのかが、図によって示されている。また、縦の列には、各評価観点からレベル1・2・3の順に分類・配置されている。

表3の評価観点は、「十字モデルを用いた論文指導のプロセスを評価の観点から体系的に表したもの」²³とされている。しかしながら、牧野は、表3の評価観点のどのような点が論文指導のプロセスに対応しているのかについて、明らかにしていない。

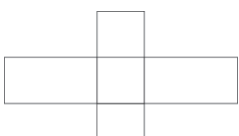
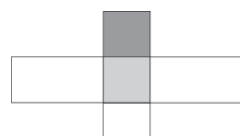
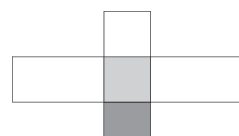
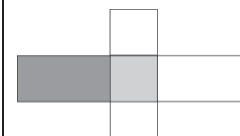
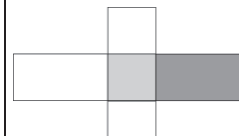
以上をふまえ、ここでは同評価観点が論文・レポート作成過程にどのように対応しているのかについて、表3に挿入された図の網掛け部分が表すことに注目して検討する。なお、網掛け部分は、左から順に【背景】・【命題】、【命題】・【提言】、【反論】・【論駁】・【命題】、【命題】・【抽象】・【具体】といった要素の組み合わせを表している。

まず【背景】・【命題】と【命題】・【提言】について気付くことは、分割されてはいるものの、牧野が提案する「実用分子」に対応している点である。また、【反論】・【論駁】・【命題】は「対話分子」に、【命題】・【抽象】・【具体】は「論証分子」に対応していることもわかる。つまり、表3の評価観点では、牧野が「三本の軸」と呼んでいた単位が評価対象として設定されているのである。

では、そうすることが、なぜ「論文指導のプロセスに対応する」のだろうか。それは、前述の三本の軸に基づいて抽出された計4つの単位が、論文・レポートの序論（＝【背景】・【命題】）、本論1（＝【命題】・【抽象】・【具体】）、本論2（＝【反論】・【論駁】・【命題】）、結論（【命題】・【提言】）に対応しているからではないだろうか。（注6）

つまり、表3の評価観点は、序論・本論・結論のそれぞれを構成する個々の要素について、序論・本論・結論の各部分の論理性や情報の質・量のレベル、全体（＝序論・本論・結論）における有機的関係性を評価するためのものだと考えられるのである。

表3「議論の十字モデル」に基づく評価の観点

十字モデル	縦軸		横軸	
	【背景】・【命題】	【命題】・【提言】	【反論】・【論駁】・【命題】	【命題】・【抽象】・【具体】
				
レベル3：全体 (有機的な関係性)	⑬【背景】では議論を展開させるうえで前提となる問題を焦点化している。 ⑭【命題】が十字の中心に位置づけられている。	⑮【背景・命題・提言】に一貫性がある。 ⑯話題が飛躍して論点がぶれたり、曖昧に終わってぼやけたりしていない。	⑰【反論・論駁・命題】は【命題・抽象・具体】と矛盾しない。 ⑱十字の縦軸（背景・命題・提言）から乖離していない。	⑲【命題・抽象・具体】は【反論・論駁・命題】と矛盾しない。 ⑳十字の縦軸（背景・命題・提言）から逸脱していない。
レベル2：内容 (情報の質と量)	⑤【背景】は公共性・信憑性の高い情報に基づいている。 ⑥議論を通して検証したい【命題】を簡潔に表現している。	⑦【提言】は問題の何がどのように解決されるのか(未解決に残るのか)を明示している。 ⑧余分な視点を新たに加えて議論を肥大化させていない。	⑨【反論】と【論駁】の双方が公共性・信憑性の高い情報に基づいている。 ⑩複数の情報がある場合は、反論と論駁が対をなし、双方に過不足がない。	⑪【抽象】を裏付ける【具体】として、客観的事実、統計データ、文献等が示されている。 ⑫【抽象】の各論点について【具体】の情報が必要十分である。
レベル1：要素 (各要素の有無・要素間の関係)	①【背景】にある問題意識に基づき、【命題】(仮説)を立てている。	②【命題】の妥当性をふまえ、問題に対する解決策を【提言】している。	③【反論】【論駁】【命題】に弁証(正反合)の関係が成立している。 (たしかに～である。しかし～である。ゆえに～といえる。)	④【命題】【抽象】【具体】に論証(演繹法・帰納法)の関係が成立している。 (～といえる。なぜなら～だからである。たとえば～がある。)

備考1) 7つの構成要素(【背景】・【命題】・【提言】・【反論】・【論駁】・【抽象】・【具体】)の名称は、筆者の補足である。
備考2) 表中の①～⑳の番号は、各評価観点に言及するために、便宜上、筆者が追加したものである。レベル1では左から順に①～④、同様にレベル2では⑤～⑩、レベル3では⑬～⑳となっている。

3.2 評価観点・レベルの配置・配列に関する課題と改善案

ここではまず、表3の評価観点の配置順序の意味について検討する。

3.1でも述べたように、表3の評価観点は、論文・レポートの序論・本論・結論及び全体の完成度を分析するための評価観点と考えられる。しかしながら、表3の評価観点は、左から順に序論（＝【背景】・【命題】）、結論（＝【命題】・【提言】）、本論2（【反論】・【論駁】・【命題】）、本論1（＝【命題】・【抽象】・【具体】）の順に配置されている。これは、実際のレポートの構成順序とは大きく異なる配置順序である。むしろ、「議論の十字」の七つの構成要素(図2)の概念図中の各要素の配置順序をできるだけ忠実に反映した配置なのではないかと考えられる。

次に、評価観点のレベルの配列順序の意味について検討する。表3では、評価観点が上からレベル3・2・1の順に配列されているのが特徴的である。

では、レベル3・2・1の「レベル」とは、具体的に何のレベルなのだろうか。論文・レポート作成では、多くの場合に、議論を思考する段階と言語化する段階の両方で議論分析を随時行い、論証や議論全体の質を高めていっていると思われる。特に、論文・レポート作成の初期段階では、議論の全体が構築できていないことから、本論1（【命題】・【抽象】・【具体】）のみや、本論2（【反論】・

【論駁】・【命題】)のみといった、限定的・局所的な議論分析にならざるを得ないことも多いと思われる。このような議論分析は、表3のレベル1・2に相当する。そして、残るレベル3の議論分析については、レベル1・2で個々の分子(=軸)内部の論理性や情報の質・量が整った後に行うか、あるいは、論理性や情報の質・量が不完全であったとしても、改善の手がかりを得る目的から、敢えて全体についての分析を行う場合もあるのではないかと考えられる。

つまり、表3のレベルが表しているのは、議論分析のレベルなのである。具体的には、レベル1・2が三本の軸の内部に含まれている要素どうしの関係性を対象とする議論分析、レベル3は軸と軸の間関係性を対象とする議論分析とみなすことができる。

以上をふまえると、表3の各レベルの配列順序は、上からレベル1・2・3の順であるほうが論文・レポート作成の実際の手順に合致しており、学習者にとって使いやすいのではないかと考えられる。

したがって本稿では、表3の評価観点の配置順序及びレベルの配列順序を、表4のように改善することを提案する。表4では、評価観点、左から序論(【背景】・【命題】)、本論1(【命題】・【抽象】・【具体】)、本論2(【反論】・【論駁】・【命題】)、結論(【提言】)の順に配置されている(以下では特に必要が無い限り、序論、本論1、本論2、結論と表記する)。また、議論分析のレベルについても、上から1・2・3の順に配列されている。

表4「議論の十字モデル」に基づく評価の観点(改善案)

議論分析の 対象	縦軸		横軸	
	序論: 【背景】・【命題】	本論1: 【命題】・【抽象】・【具体】	本論2: 【反論】・【論駁】・【命題】	結論: 【命題】・【提言】
議論分析の レベル				
レベル1: 要素 (各要素の有無・要素間の関係)	①【背景】にある問題意識に基づき、【命題】(仮説)を立てている。(←①)	②【命題】【抽象】【具体】に論証(演繹法・帰納法)の関係が成立している。 (～といえる。なぜなら～だからである。たとえば～がある。)(←④)	③【反論】【論駁】【命題】に弁証(正反合)の関係が成立している。 (たしかに～である。しかし～である。ゆえに～といえる。)(←③)	④【命題】の妥当性をふまえ、問題に対する解決策を【提言】している。(←②)
レベル2: 内容 (情報の質と量)	⑤【背景】は公共性・信憑性の高い情報に基づいている。(←⑤) ⑥議論を通して検証したい【命題】を簡潔に表現している。(←⑥)	⑦【抽象】を裏付ける【具体】として、客観的事実、統計データ、文献等が示されている。(←⑩) ⑧【抽象】の各論点について【具体】の情報が必要十分である。(←⑫)	⑨【反論】と【論駁】の双方が公共性・信憑性の高い情報に基づいている。(←⑨) ⑩複数の情報がある場合は、反論と論駁が対をなし、双方に過不足がない。(←⑩)	⑪【提言】は問題の何がどのように解決されるのか(未解決に残るのか)を明示している。(←⑦) ⑫余分な視点を新たに加えて議論を肥大化させていない。(←⑧)
レベル3: 全体 (有機的な関係性)	⑬【背景】では議論を展開させるうえで前提となる問題を焦点化している。(←⑬) ⑭【命題】が十字の中心に位置づけられている。(←⑭)	⑮【命題・抽象・具体】は【反論・論駁・命題】と矛盾しない。(←⑮) ⑯十字の縦軸(背景・命題・提言)から逸脱していない。(←⑯)	⑰【反論・論駁・命題】は【命題・抽象・具体】と矛盾しない。(←⑰) ⑱十字の縦軸(背景・命題・提言)から乖離していない。(←⑱)	⑲【背景・命題・提言】に一貫性がある。(←⑲) ⑳話題が飛躍して論点がぶれたり、曖昧に終わってぼやけたりしていない。(←⑲)

備考1) 7つの構成要素(【背景】・【命題】・【提言】・【反論】・【論駁】・【抽象】・【具体】)の名称は、筆者の補足である。
備考2) 表中の①～⑳の番号は、各評価観点に言及するために、便宜上、筆者が追加したものである。レベル1では左から順に①～④、同様にレベル2では⑤～⑫、レベル3では⑬～⑳となっている。
備考3) 各評価観点末尾の()内の番号は、表3で付与されていた番号である。

3.3 有機的関係性の分析に関する課題と改善案

表4のレベル3は、「実用分子」、「論証分子」、「対話分子」について、軸と軸の間の有機的関係性を検討するレベルである。では、実際の論文・レポートの序論・本論・結論の間の関係性を適切に分析するためには、どのような軸（または、軸を分割した単位）を、どのような順序で、どのように組み合わせて分析していけばよいのだろうか。

有機的関係性を分析する上で最も基本的な軸（または単位）の組み合わせは、序論と本論1、序論と本論2ではないかと思われる。なぜなら、序論と本論の間には、「序論を的確にふまえて本論が述べられる」という関係性が成立している必要があるからである。

次に考えられるのが、本論1と本論2の組み合わせである。このことについて、クルーシアス・チャンネル²⁴は、(反論、論駁も含めた)根拠の選択と整理をする上で、論点(主張)及び読者のニーズ・期待の他に、根拠自体の関連性も考慮する必要があると述べている。つまり、本論1と本論2の有機的関係性は、議論の説得力を強化する上で欠かせないのである。

では、結論はどのような軸または単位との組み合わせで分析すべきだろうか。結論と序論・本論の間には、「序論・本論で提示されたすべての情報を的確にふまえて結論が述べられる」という関係性が成立している必要がある。したがって、結論については、序論、本論1、本論2のそれぞれとの組み合わせの下で、有機的関係性を分析する必要があるだろう。ただし、この段階では、評価に関わる軸や単位の数が多く、組み合わせの全体像がつかみにくい。以下では、表4を整理し直しながら、必要な組み合わせを検討する。

表5 「議論の十字モデル」に基づく評価の観点(レベル3)

議論分析の 対象		縦軸		横軸		縦軸
		序論: 【背景】・【命題】	本論1: 【命題】・【抽象】・【具体】	本論2: 【反論】・【論駁】・【命題】	結論: 【命題】・【提言】	
議論分析の レベル						
レベル 3:全体 (有機 的な関 係性)	【背景】・【命題】 と【命題】・【抽 象】・【具体】	⑬【背景】では議論を展開 させるうえで前提とな る問題を焦点化してい る。	⑭十字の縦軸(背景・命 題・提言)から逸脱して いない。			
	【背景】・【命題】 と【命題】・【抽 象】・【具体】	⑬'【背景】では議論を展開 させるうえで前提とな る問題を焦点化してい る。		⑮十字の縦軸(背景・命 題・提言)から乖離して いない。		
	【背景】・【命題】 と【反論】・【論 駁】・【命題】		⑮【命題・抽象・具体】は 【反論・論駁・命題】と 矛盾しない。	⑰【反論・論駁・命題】は 【命題・抽象・具体】と 矛盾しない。		
	【背景】・【命題】、 【命題】・【抽象】・ 【具体】、【反論】・ 【論駁】・【命題】 と【命題】・【提言】	⑬''【背景】では議論を展開 させるうえで前提とな る問題を焦点化してい る。	⑭'十字の縦軸(背景・命 題・提言)から逸脱して いない。	⑮'十字の縦軸(背景・命 題・提言)から乖離して いない。		評価観点が欠けている..
	【背景】・【命題】・ 【提言】					⑲【背景・命題・提言】に 一貫性がある。 ⑳話題が飛躍して論点が ぶれたり、曖昧に終わ ってぼやけたりしてい ない。
	【命題】	⑱【命題】が十字の中心に 位置づけられている。				

表5は、表4の⑬～⑳の評価観点を上述の組み合わせにしたがって配置し直したものである。組

み合わせの数に比べて元々の評価観点の数が少なく、すぐに不足することから、必要に応じて同じ評価観点を重複して使用してある。その場合は、番号の右上に「'」や「''」を付し、重複して使用されていることを明示した。

表5はまず、レベル3の分析で取り上げる軸（または単位）が、序論と本論1、序論と本論2、本論1と本論2の3つの組み合わせであることを示している。そして、この組み合わせの有機的關係性の分析に関わる評価観点が、それぞれ⑬と⑭、⑬'と⑭、⑮と⑯であることも示している。

表5はまた、序論・本論1・本論2と結論の間でも、有機的關係性の分析が必要であることを示している。しかし同時に、2つの問題も示している。1つ目は、序論、本論1、本論2においてそれぞれ⑬'', ⑭', ⑮'の評価観点が設定されている一方、結論に関する評価観点が欠けていることである。2つ目は、⑭・⑭', ⑮・⑮', ⑬・⑬'・⑬''の評価観点の文言の中で、議論分析の対象となる軸（または単位）を正確に捉え切れていないことである。

ここでは初めに2つ目の問題を取り上げ、問題の原因と改善案を検討する。

表5の⑭では、本論1について、序論と結論の両方から逸脱していないかどうかを検討することが求められている。しかし、ここで実際に評価されるのは、序論（【背景】・【命題】）と本論1（【命題】・【抽象】・【具体】）の関係のみである。したがって、【提言】への言及は、ここでは不要になる。次に⑭'では、本論1について、結論との関係を検討することが求められている。したがって、ここで序論（【背景】・【命題】）への言及は不要である。さらに、⑮・⑮'でも同様の問題が生じており、⑮では【提言】への言及が、⑮'では序論（【背景】・【命題】）への言及がともに不要と考えられる。

これらの問題への対応として、⑭・⑭'及び⑮・⑮'から不要な要素を外す修正が施されるのであれば、⑬・⑬'・⑬''の文言もあわせて調整する必要が生じる。具体的には、表5の「議論を展開させる上で前提となる問題」という文言を、有機的關係性を構築する軸または単位が具体的に何であるか明示する形へと変更するのである（表6）。

表6 「議論の十字モデル」に基づく評価の観点（レベル3）（改善案）

議論分析の対象		縦軸	横軸		縦軸
		序論： 【背景】・【命題】	本論1： 【命題】・【抽象】・【具体】	本論2： 【反論】・【論駁】・【命題】	結論： 【命題】・【提言】
議論分析のレベル					
レベル3： 全体 （有機的關係性）	【背景】・【命題】と【命題】・【抽象】・【具体】	⑬ 【背景】では【命題】・【抽象】・【具体】を提示するうえで前提となる問題を焦点化している。	⑭ 十字の縦軸（背景・命題）から逸脱していない。		
	【背景】・【命題】と【命題】・【抽象】・【具体】	⑬' 【背景】では【反論】・【論駁】・【命題】を提示するうえで前提となる問題を焦点化している。		⑮ 十字の縦軸（背景・命題）から乖離していない。	
	【背景】・【命題】と【反論】・【論駁】・【命題】		⑮ 【命題・抽象・具体】は【反論・論駁・命題】と矛盾しない。	⑯ 【反論・論駁・命題】は【命題・抽象・具体】と矛盾しない。	
	【背景】・【命題】、【命題】・【抽象】・【具体】、【反論】・【論駁】・【命題】と【命題】・【提言】	⑬'' 【背景】では【命題】・【提言】を提示するうえで前提となる問題を焦点化している。	⑯' 十字の縦軸（提言）から逸脱していない。	⑯'' 十字の縦軸（提言）から乖離していない。	評価観点が欠けている。

	【背景】・【命題】・【提言】				⑨【背景・命題・提言】に一貫性がある。 ⑩話題が飛躍して論点がぶれたり、曖昧に終わってぼやけたりしていない。
	【命題】	⑪【命題】が十字の中心に位置づけられている。			

次に、1つ目の問題（＝序論・本論1・本論2と結論の間でも有機的関係性の分析が必要であるにもかかわらず、表5では結論について分析するための評価観点が欠けている点）を取り上げる。では具体的に、どのような評価観点が適当であろうか。

検討の前に、【提言】の下位要素について述べておく。表4に戻るが、レベル1の④、レベル2の⑩は、それぞれ「問題に対する解決策」と「問題の何がどのように解決されるのか（未解決に残るのか）」といった情報が提示されているか否かを検討するように求めている。これらの評価観点は、【提言】が【提言（未解決の事柄）】と【提言（解決策）】という2つの下位要素から成ることを前提にしたものである。

さらに、【提言（未解決の事柄）】・【提言（解決策）】のそれぞれが、論文・レポート中の序論、本論1、本論2で提示された情報を的確にふまえて提示されるべきものであることを考慮すると、現在欠落している評価観点は、厳密には、【提言（未解決の事柄）】と【提言（解決策）】のそれぞれについて別々に設定する必要があることもわかる。その結果、有機的関係性の分析は、序論・本論1・本論2と結論（【提言（未解決の事柄）】）、序論・本論1・本論2と結論（【提言（解決策）】）のそれぞれの組み合わせについて分析することになる。この組み合わせを表にまとめたものが、表6'である。

表 6' 「議論の十字モデル」に基づく評価の観点（レベル3）（改善案）

議論分析の対象		縦軸	横軸		縦軸
		序論： 【背景】・【命題】	本論1： 【命題】・【抽象】・【具体】	本論2： 【反論】・【論駁】・【命題】	結論： 【命題】・【提言】
議論分析のレベル					
レベル3:全体 (有機的な関係性)	【背景】・【命題】と【命題】・【抽象】・【具体】	⑬【背景】では【命題】・【抽象】・【具体】を提示するうえで前提となる問題を焦点化している。	⑭十字の縦軸（背景・命題）から逸脱していない。		
	【背景】・【命題】と【命題】・【抽象】・【具体】	⑬'【背景】では【反論】・【論駁】・【命題】を提示するうえで前提となる問題を焦点化している。		⑭'十字の縦軸（背景・命題）から乖離していない。	
	【背景】・【命題】と【反論】・【論駁】・【命題】		⑮【命題・抽象・具体】は【反論・論駁・命題】と矛盾しない。	⑮'【反論・論駁・命題】は【命題・抽象・具体】と矛盾しない。	
	【背景】・【命題】、【命題】・【抽象】・【具体】、【反論】・【論駁】・【命題】と【命題】・【提言（未解決の事柄）】	⑬''【背景】では【命題】・【提言（未解決の事柄）】を提示するうえで前提となる問題を焦点化している。	⑭''十字の縦軸（【提言（未解決の事柄）】）から逸脱していない。	⑭''十字の縦軸（【提言（未解決の事柄）】）から乖離していない。	評価観点が欠けている。

	【背景】・【命題】、 【命題】・【抽象】・ 【具体】、【反論】・ 【論駁】・【命題】 と【命題】・【提言 （解決策）】	⑬''' 【背景】では【命 題】・【提言（解決策）】 を提示するうえで前提 となる問題を焦点化し ている。	⑭'' 十字の縦軸（【提言 （解決策）】）から逸脱 していない。	⑮'' 十字の縦軸（【提言 （解決策）】）から乖離 していない。	評価観点が欠けている。
	【背景】・【命題】・ 【提言】				⑯【背景・命題・提言】に 一貫性がある。 ⑰話題が飛躍して論点が ぶれたり、曖昧に終わ ってぼやけたりしてい ない。
	【命題】	⑱【命題】が十字の中心に 位置づけられている。			

表 6'では、結論（【命題】・【提言】）が結論（【命題】・【提言（未解決の事柄）】）・結論（【命題】・【提言（解決策）】）に細分化されたことに伴い、表 6では⑬''・⑭''・⑮''だけであったものが、表 6'では⑬''・⑭''・⑮''と⑬'''・⑭'''・⑮'''とに細分化されている。

では、以上の調整を受けて、結論に対してはどのような評価観点を新たに設定すると良いのだろうか。本稿では、【提言（未解決の事柄）】・【提言（解決策）】が、レポート中で序論、本論 1、本論 2のすべての情報を的確にふまえて検討・提示されるべきであることを重視し、表 6''の新たな評価観点①・新たな評価観点②のように設定することを提案する。

表 6'' 「議論の十字モデル」に基づく評価の観点（レベル 3）（改善案）

議論分析の 対象	縦軸	横軸		縦軸	
		序論： 【背景】・【命題】	本論 1： 【命題】・【抽象】・【具体】		本論 2： 【反論】・【論駁】・【命題】
議論分析の レベル					
レベル 3:全体 （有機 的な関 係性）	【背景】・【命題】 と【命題】・【抽 象】・【具体】	⑬【背景】では【命題】・ 【抽象】・【具体】を提示 するうえで前提となる 問題を焦点化してい る。	⑭十字の縦軸（背景・命 題）から逸脱してい ない。		
	【背景】・【命題】 と【命題】・【抽 象】・【具体】	⑬'【背景】では【反論】・ 【論駁】・【命題】を提示 するうえで前提となる 問題を焦点化してい る。		⑮十字の縦軸（背景・命 題）から乖離してい ない。	
	【背景】・【命題】 と【反論】・【論 駁】・【命題】		⑯【命題・抽象・具体】は 【反論・論駁・命題】と 矛盾しない。	⑰【反論・論駁・命題】は 【命題・抽象・具体】と 矛盾しない。	
	【背景】・【命題】、 【命題】・【抽象】・ 【具体】、【反論】・ 【論駁】・【命題】 と【命題】・【提言 （未解決の事 柄）】	⑱'''【背景】では【命題】・ 【提言（未解決の事 柄）】を提示するうえで 前提となる問題を焦点 化している。	⑱'十字の縦軸（【提言（未 解決の事柄）】）から逸 脱していない。	⑱''十字の縦軸（【提言（未 解決の事柄）】）から乖 離していない。	新たな評価観点①： 【提言（未解決の事柄）】 が、【背景】・【命題】【抽 象】・【具体】・【反論】・【論 駁】の情報を的確にふま えた内容になっている。
	【背景】・【命題】、 【命題】・【抽象】・ 【具体】、【反論】・ 【論駁】・【命題】 と【命題】・【提言 （解決策）】	⑲'''【背景】では【命 題】・【提言（解決策）】 を提示するうえで前提 となる問題を焦点化し ている。	⑲''十字の縦軸（【提言 （解決策）】）から逸脱 していない。	⑲''十字の縦軸（【提言 （解決策）】）から乖離 していない。	新たな評価観点②： 【提言（解決策）】が、【背 景】・【命題】【抽象】・【具 体】・【反論】・【論駁】の情 報を的確にふまえた内容 になっている。
	【背景】・【命題】・ 【提言】				⑲【背景・命題・提言】に 一貫性がある。 ⑳話題が飛躍して論点が

					ぶれたり、曖昧に終わってぼやけたりしていない。
	【命題】	④【命題】が十字の中心に位置づけられている。			

以上の検討により、全体の有機的関係性を検討するために参照される軸や単位の組み合わせの全体像が明らかになったと考えられる。

しかし、表 6'' に掲載されている個々の評価観点とは、基本的には表 4 のものが継承されている状況である。論文・レポート上で有機的な関係性を成立させている軸や単位の間には、一方の軸（または単位）に情報を提供し、もう一方が提示された情報をふまえるという、一方向的な関係性が成立している。今後はそのような関係性もふまえた、より実際の評価観点へと改善していく必要があると思われる。また、表 6'' には、有機的関係性とはやや異質に感じられる評価観点も含まれている。⑭と⑰・⑳である。今後は、それらの評価観点の必要性や、他の評価観点との統合の可能性も考える必要があるだろう。

3.4 論理性と情報の質・量の分析に関する課題と改善案

レベル 2 には、⑤～⑫の評価観点がある。表 7 は、これらを実評価対象と評価観点の種類の間から配置しなおしたものである。

表 7 「議論の十字モデル」に基づく評価の観点（レベル 2）

議論分析の対象		縦軸	横軸		縦軸
		序論： 【背景】・【命題】	本論 1： 【命題】・【抽象】・【具体】	本論 2： 【反論】・【論駁】・【命題】	結論： 【命題】・【提言】
議論分析のレベル					
レベル 2： 内容 (情報の質と量)	公共性・信憑性の高い情報か	⑤【背景】は公共性・信憑性の高い情報に基づいている。	⑦【抽象】を裏付ける【具体】として、客観的事実、統計データ、文献等が示されている。	⑨【反論】と【論駁】の双方が公共性・信憑性の高い情報に基づいている。	
	簡潔な表現か	⑥議論を通して検証したい【命題】を簡潔に表現している。			
	情報が必要十分か		⑧【抽象】の各論点について【具体】の情報が必要十分である。		
	対の過不足			⑩複数の情報がある場合は、反論と論駁が対をなし、双方に過不足がない。	
	未解決の事柄・解決策の明示とその内容				⑪【提言】は問題の何がどのように解決されるのか（未解決に残るのか）を明示している。
	余分な視点（議論の肥大化）の有無				⑫余分な視点を新たに加えて議論を肥大化させていない。

ここで、評価観点の種類に注目されたい。⑤・⑦・⑨は「情報の公共性・信憑性」に関する評価観点、⑥は【命題】の簡潔さ、⑧は【具体】の情報量、⑩は【反論】・【論駁】の対の過不足、⑪は

【提言】の具体性，⑫は余分な視点の有無となっており，それぞれ視点の種類を異にしていることがわかる。

また，表 7 のように評価視点を種類別に分けて配列することで，評価対象の間で評価視点の数・種類に不均衡が生じていたり，曖昧な内容の評価視点が存在していたりすることもわかる。

例えば，情報の過不足という点では，本論 1 に関して【具体】の情報量が評価視点に挙がっている一方（=⑫），序論，本論 2，結論については，そのような評価視点は設定されていない。さらに，本論 2 に関する評価視点には【反論】と【論駁】の対の過不足が挙げられているが（=⑩），本論 1 に関しては【抽象】と【具体】の対の過不足は設定されていない。さらに，⑪では，【提言（未解決の事柄）】・【提言（解決策）】が明示されているか否かと，それぞれの情報が必要十分に提示されているか否かという 2 つの評価視点が含まれており，学習者にとってはどちらを分析すべきか曖昧な内容になっている。

これらの不均衡や，評価視点の曖昧さの問題を改善するために，本稿では，新たな評価視点③・④・⑤・⑥を設定することを提案する（表 7'）。

表 7' 「議論の十字モデル」に基づく評価の観点（レベル 2）（改善案）

議論分析の対象		縦軸	横軸		縦軸
		序論： 【背景】・【命題】	本論 1： 【命題】・【抽象】・【具体】	本論 2： 【反論】・【論駁】・【命題】	結論： 【命題】・【提言】
議論分析のレベル					
レベル 2: 内容 (情報の質と量)	公共性・信憑性の高い情報が	⑤【背景】は公共性・信憑性の高い情報に基づいている。	⑦【抽象】を裏付ける【具体】として，客観的事実，統計データ，文献等が示されている。	⑨【反論】と【論駁】の双方が公共性・信憑性の高い情報に基づいている。	
	簡潔な表現が	⑥議論を通して検証したい【命題】を簡潔に表現している。			
	情報が必要十分か	新たな評価視点③：【命題】について【背景】の情報が必要十分である。	⑧【抽象】の各論点について【具体】の情報が必要十分である。	新たな評価視点④：【反論】と【論駁】において，双方の情報が必要十分である。	新たな評価視点⑥：【結論（未解決の事柄）】と【結論（解決策）】において，双方の情報が必要十分である。
	対の過不足		新たな評価視点⑤：【抽象】と【具体】が対をなし，双方に過不足がない。	⑩複数の情報がある場合は，反論と論駁が対をなし，双方に過不足がない。	
	余分な視点（議論の肥大化）の有無				⑫余分な視点を新たに加えて議論を肥大化させていない。

備考) ⑪に含まれていたもう 1 つの評価視点（=【提言（未解決の事柄）】・【提言（解決策）】が明示されているか否か）については，レベル 1 において「新たな評価視点⑦」として設定することとする（紙幅の都合上，ここではレベル 1 の全体の掲載は行わない）。

以上の検討の結果，表 7' では評価視点の種類が 5 つに単純化された一方で，新たな評価視点が 4 項目追加され充実した。しかし平行して，情報の質・量に関する評価視点としてはやや異質に感じられるものも出てきたのではないと思われる。具体的には，⑥と⑫である。

まず，⑫に関しては，表 6'' (3.3 節) の⑬・⑭と内容が似通っていると思われることから，削除や統合の可能性も視野に入れつつ，今後の課題としたい。

最後に，表 7 の⑥について述べる。⑥では【命題】（=「論理のしくみ図」の【主張】）について「簡潔さ」が問われている。果たして，「簡潔さ」とはどのような意味でのことであろうか。

クルーシアス・チャンネル²⁵は、特に「納得させるための議論」の構築に際して、「論点 (thesis)」と「立場 (position)」を区別することの必要性を指摘している。指摘によれば、「立場」とはある事柄についてのまとまった態度や判断であるのに対し、「論点」は限定的で正確であるだけでなく、より戦略的でなくてはならない。このような「レトリック」の分野からの助言を取り入れることにより、「簡潔さ」が【命題】の何についての評価であるのか」といったことから再検討する必要があると思われる。これも、今後の課題としたい。

4 おわりに

本稿では、論文・レポートの構成に沿った議論分析の手法として「議論の十字モデル」に基づく評価の観点」を使用した場合の問題点と改善案について検討を行った。その結果、牧野の評価観点表では、(1) 評価観点とレベルの配置・配列、(2) 有機的関係性の分析、(3) 論理性と情報の質・量の分析の3点に関して問題が生じることが明らかになった。

以上の検討結果をふまえ、本稿では、(1) の問題については表 4 (=論文・レポートの構成に沿った配置、議論分析の実際の手順に沿った配列への変更)、(2) については表 6'' (有機的関係性を検討する必要がある軸・単位の組み合わせの全体像の提示)、(3) については表 7' (=評価観点の不均衡・曖昧さの是正) のような改善案を提示した。

しかしながら、(2) の問題については、論文・レポート中の軸や単位の間で成立している一方向的な関係 (=一方が他方の軸 (または単位) に情報を提供し、もう一方が、提供された情報を的確にふまえるという関係) を、今後、評価観点の文言の中にどのように反映できるかという点が課題になること、(3) については、【命題】の「簡潔さ」を今後どのように規定すべきかが課題になることを指摘した。また、削除や統合について検討すべき評価観点が他に存在することも確認した。

近年、日本語アカデミックライティング教育における評価活動については、評価を通じて学習者が自律的に学習することのできる機能をもたせる必要性が主張されている。^{26,27} 今後は、そのような機能も担うことのできる議論分析手法の開発を目指しつつ、残された課題に取り組みたい。

注

(注1) 2006年から2015年の間に、『リメディアル教育研究』・『初年次教育学会誌』・『大学教育学会誌』に掲載された授業実践に関する29編の論考のレビュー結果である。

(注2) トゥールミン²⁸の「Layout of Arguments (論証のレイアウト)」に示された、議論のパターンのこと。同パターンには、「Data (データ)」・「Claim (主張や結論)」・「Warrants (論拠)」・「Backing of Warrants (裏づけ)」・「Qualifier (限定詞)」・「Rebuttal (論駁)」の計6つの要素が含まれる。

(注3) 論証構造図を用いた事例²⁹では、具体的な評価指標については報告されていない。なお、同じ教育実践に携わったと思われる薄井³⁰の報告でも、論証の評価を目的とする評価指標は提示されていない。なお、その後の薄井³¹の報告では、7つの評価指標の1つに「主張が明確であり、根拠(経験的事実)と論拠によって支持されている。(議論・論証レベル)」が設定されている。

(注4) 福澤³²は、「自分の言いたい主張とか結論を、なんらかの根拠(証拠)によって裏づけようとする行為、またはどうしてこれこれしかじかの主張、結論になるかの理由を述べること」は一般的に「論証」と呼ばれていると述べている。そして、「なんらかの根拠(証拠)に基づいてなんらかの主張(または結論)を導くような言語行動、(中略)論証プロセスを経て結論にいたるような言動」のことを「議論」と呼んでいる。

(注5) 牧野³³は後に、演繹的・帰納的な関係に関わる要素を「論理のしくみ図」の【主張】(=「議論の十字」の七つの構成要素)の【命題】まで拡大している。具体的に「議論の十字」(図2)の要

素名を用いて整理すると、【命題】・【抽象】・【具体】の3つの要素が「論証（演繹法・帰納法）の関係」を構成するとしている。牧野³⁴はまた、「議論の十字」（図2）の【反論】・【論破】・【命題】の間に、「弁証（正反合）の関係」を設定している。

（注6）本論に付した番号は、論文・レポートでの【命題】・【抽象】・【具体】と【反論】・【論駁】・【命題】の配置順序をふまえ、前者を本論1、後者を本論2とした。

引用文献

- 1 大場理恵子, 大島弥生. 大学教育における日本語ライティング指導の実線の動向: 学術雑誌掲載実践報告のレビューを通じて. 言語文化と日本語教育. 2015, 51, p.1-10.
- 2 前掲 1), p.6 参照.
- 3 スティーブン・トゥールミン. 議論の技法: トゥールミンモデルの原点. 戸田山和久, 福澤一吉訳. 東京図書, 2011, p.143-157.
- 4 篠崎祐介. アクティブ・ラーニングによる文章表現指導の研究: 大学初年次教育科目における実践を基にして. リメディアル教育研究. 2015, 10(2), p.160-170.
- 5 大野早苗. ディベートの型を用いた文章表現指導の試み. リメディアル教育研究. 2015, 10(1), p.102-107.
- 6 棕本洋, 薄井道正, 吉岡路. 「特殊講義（アカデミック・リテラシー）【日本語の技法】」について: 学部横断型初年次日本語教育の実践. リメディアル教育研究. 2013, 8(2), p.199-202.
- 7 前掲 4, p.46 参照.
- 8 前掲 5, p.106.
- 9 河野哲也. “解題: アーギュメント（議論）教育のために.” T. W. クルーシアス, C.E. チャンネル. 大学で学ぶ議論の技法. 杉野洋子, 中西千春, 河野哲也訳. 慶応義塾大学出版会, 2011, p.vii.
- 10 T. W. クルーシアス, C.E. チャンネル. 大学で学ぶ議論の技法. 杉野洋子, 中西千春, 河野哲也訳. 慶応義塾大学出版会, 2011, p.44.
- 11 牧野由香里. “第2章 「十字モデル」で共同的に論文を組み立てる.” 関西地区FD連絡協議会, 京都大学高等教育研究開発推進センター編. 思考し表現する学生を育てるライティング指導のヒント. ミネルヴァ書房, 2013, p.50.
- 12 牧野由香里. 議論のデザイン: メッセージとメディアをつなぐカリキュラム. ひつじ書房, p.103.
- 13 前掲 12, p.103 参照.
- 14 前掲 12, p.103 参照.
- 15 前掲 12, p.207 参照.
- 16 前掲 12, p.207 参照.
- 17 前掲 12, p.207 参照.
- 18 前掲 12, p.138 参照.
- 19 前掲 12, p.104 参照.
- 20 前掲 12, p.105-106 参照.
- 21 前掲 12, p.106 参照.
- 22 前掲 11, p.50 参照.
- 23 前掲 11, p.49 参照.
- 24 前掲 10, p.134 参照.
- 25 前掲 10, p.117 参照.
- 26 西谷尚徳. <実践報告>文章力養成のためのルーブリック活用の教育的意義の検討: 授業実践から見る教育手法. 京都大学高等教育研究. 2017, 23, p.25-35.
- 27 原田三千代. 内省型ルーブリックによる対話的評価活動の分析. 三重大学教育学部研究紀要. 2017, 68, p.317-332.
- 28 前掲 3 参照.
- 29 前掲 6 参照.
- 30 薄井道正. “第4章 初年次アカデミック・リテラシー科目「日本語の技法」.” 関西地区FD連絡協議会, 京都大学高等教育研究開発推進センター編. 思考し表現する学生を育てるライティング指導のヒント. ミネルヴァ書房, 2013, p.84.
- 31 薄井道正. 初年次アカデミック・ライティング科目における指導法とその効果: パラグラフ・ライティングと論証を柱に. 京都大学高等教育研究. 2015, 21, p.15-25.
- 32 福澤一吉. 議論のレッスン. 日本放送出版協会. 2002, p.27, (生活人新書, 025).
- 33 前掲 11, p.35 参照.
- 34 前掲 11, p.35 参照.

